
おかしな、ふたり。

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかしな、ふたり。

【Nコード】

N3325R

【作者名】

RAN

【あらすじ】

一見正反対に見える真面目少女と不良少年。でもあることから二人は関わり合うことに。おかしな二人のおかしな日常。

サイト、dノベ転載

朝読書

私は誰もいない学校が好きだ。

正確に言つと、誰もいない朝の学校が好きだ。

静かだが、冷たい印象はなく、朝日に眩しい教室は温かかった。

その温もりに包まれる時間が私は好きだった。

だからいつも朝早くに学校に行き、誰もいない教室にいる。

そこで何をしているかと言えば、静かなのを利用して、たまって
いる本を読んでいる。

これがとても効果があり、本が進む進む。

しかしそんな穏やかな朝を壊す声が今日も聞こえてきた。

「つれづれなるままに、日ぐらしすずりにむかひて……」

声はよかった。少年らしい高くも低くもない声だった。

まるで国語の授業で作文を読む小学生のような読み方だ。

しかも字面のまま読んでいる。

むか「ひ」て、じゃなくて、そこは「い」と読め。

私が学校に入学してからずっとそいつはそうやって色々な有名作
品の有名な部分を大声で読んでいた。

しかも、廊下を歩きながら読んでいるのだ。

よく恥ずかしくないなと思う。誰か聞いているとは思わないのだ
ろうか。

というか、聞かされる方もたまったものじゃない。

聞かされ続けてもう二ヶ月は経っていた。

よく自分もここまで我慢したものだ。

しかし、もう我慢の限界だ。

ちようど、そいつは私の教室の横を通り過ぎようとしていた。

今日こそ物申す！

「あんだ！ いい加減にしなさいよ！！ この学校にいるのはあんなだけじゃないんだから、あんまりうるさくしないでよね……！」

私がその声をかけて振り向いたのは、学年では有名な不良だった。黒い学ランとではかなりギャップが激しい短めの金髪とピアスがトレードマークだった。

彼は驚いたように目をまん丸にして私を見ていた。相手が相手なだけに、私もさすがに今になって腰がひけてきた。

「……悪かった」

と、彼は私から視線をそらして、小さな声でそう言った。そして、踵を返し、また歩き出していった。

「……あ」

私はなんとなくそのまま行かせるのはもったいない気がして、なんとか声をかけようと言葉を探した。

「あと！ 『むかひて』、じゃなくて、『むかいて』、だよ！」

彼はまたびつくりしたように体を大きく震わせて、こちらを恐る恐る振り返った。

今気がついたが、彼の顔は真っ赤だった。

聞かれて恥ずかしかったのか……？

「あ、ありがとな」

彼はまた私とは視線を合わさないまま、そう言って今度は走ってその場を去った。

やっぱり恥ずかしかったようだ。

ということは、人がいたのに気づいていなかったのか。

意外な彼の一面が見てしまった。なんだかちよつと得した気分になった。

また、彼が来たら声をかけてみようか。

それとも、もう懲りて別な場所で読んでしまうかな。

まあ、縁があればまた話しかける機会はあるよ、きっと。

やっぱり朝の学校は素敵だと思った、そんなある日。

RAN

2006/6/29

みんな違つて みんないい

「あれ、フランス革命つて何年だっけ？」

私が無気なく世界史の教科書を眺めながら隣の友人に問うと、
「1789」

私の頭上からぼそりと聞きなれた声が出た。

「柴山！」

私が机から立ち上がつて、教室の廊下側の窓から顔を出した時には、アイツはもう教室から離れていた。

「今わかつてたのにー！」

私は悔しげに机に座りこみ、拳で机を叩いた。

「本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』で展開した論……」

何気なく国語便覧を眺めて、ふと口にした。

「もののあはれ」

別にクイズを出したわけでもないのに、答えが返ってきた。

聞きなれた声に俺は廊下側の窓から教室の外を見た。

すぐそこには、佐藤がいい気味だと言いたげな笑みをこちらに向け、そして去つていった。

「……………」

俺は無言でその後ろ姿を見送った。

なんとなく、悔しかった。

「藤原四家があつてさー」

「四つて何あつたっけ？」

私が話していると、友人がそう聞いてきた。

「あ……えーとね……」

「北家・房前、南家・武智麻呂、式家・宇合、京家・麻呂」
また聞こえてきた。

さらにスラスラときれいに答えてしまるのが腹が立つ。

「今言おうとしてたの!!!」

私は机を両手で叩いて、柴山をきつと睨みつけた。

「あーそーかい」

そう言つと、柴山はあの憎たらしい笑みをうかべて、そのまま自分の教室に入つていった。

「~~~~~!!!」

私は悔しまぎれに机を何回も叩いた。

「え、恵理、落ち着いて!」

友人は、私の手を慌てて私の手を抑えてくれた。

「夏の大三角形の星は何?」

佐藤が俺に偉そうにそう問題を出した。

たまに俺が屋上や階段にいと、こうやって話しかけてくることがあるのだ。

今日は屋上への非常階段に座っている所を話しかけられた。

そういえば、こいつの教室はこちらに近かった。

失敗したかも、と思いつつも、俺は佐藤の問題の答えを、頭の中の引き出しから一生懸命探していた。

「……………こと座のベガ……………わし座のアルタイル……………はくちょう座の……………ジュネーブ……………?」

「デネブ。どこの国の話よ」

馬鹿にしたように、佐藤はため息まじりにそう言った。

とんちんかな答えをしてしまったことを知つて、俺は恥ずかしくなつた。

だが、佐藤の反応はいちいち癪に障る。

「あー! お前いちいちうるせえんだよ!」

俺はついついそう言つてしまった。

そう言つて、佐藤がどういつ反応をするかわかっているのに。それが不毛だとわかっているのに。

なぜか言葉を出さずにはいられない。

「何それ！？ 自分が頭悪いからって八つ当たりしないでくれる？」
全く予想通りの反応だった。

そうして、俺と佐藤の応酬は授業開始のチャイムが鳴るまで続けられるのだ。

「……またやってるの？」

「うん、そうみたい」

「あいつらも懲りないねー」

「なんか急に仲良くなったよね、恵理と柴山君」

「どういうつながりなんだかね」

「まあ、そこも気になるけど……それにしても、柴山君、恵理の前だとキャラ違うよねー」

「恵理が構いたくなるのもわかるっていうかね」

「うん、なんかかわいいよね」

「それにしてもさ、あいつら頭いいのか悪いのかはつきりしてほしいよね。どんだけ勉強大好きなの」

「違う。マニアなのよ。あいつらの問題偏りすぎだもの。明らかに文系科目ばっかよ」

「……確かに。あいつら、できない所を補ってるようで全然補ってないわよね」

「まあ、それでもいいんじゃない。合ってるわよ、あいつら」

「なんだかんだ言ってるね」

そんな会話を友人二人がしているなどと、当の本人達は気づいていないのだった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
6
/
2
9
*
*
*

テスト前

「うああ、どうしよう、明日数学のテストだよー」

恵理は数学の教科書を睨みつけていたが、急に机に突つ伏す。
現在放課後。恵理とその友人の大山可南子は教室にいた。

「恵理は数学すごい苦手だもんねー」

恵理の机の前にいた可南子が苦笑いを浮かべていた。

「嫌いじゃないんだけどなー、何かわからないんだよね」

恵理は起き上がり、また数学の教科書を睨みつけた。

「あんた、そんな睨んでたって頭になんか入らないよ」

「そんなこと言ったって……。そしたら可南子教えてよー」

「あたしだっていっぱいいいよ……。あ、柴山君だよ」

可南子が恵理の目から逃れようと視線をさまよわせていると、廊下の向こうから来る人物に目を留めた。

恵理も可南子の目の先を追って、振り向く。

あの金髪はどうあっても間違えようがない。

「ホントだ。柴山ー、柴山ー」

柴山は聞こえてくる声に顔を向けた。

途端に、嫌そうな顔をしてその場に立ち止まった。

「柴山、ちようどよかった。こっち来てー」

恵理は気にせず、手を大きく振って柴山を呼ぶ。

「……………」

柴山は動かない。

「……………」
恵理も柴山が動かないので、黙って柴山を見る。
しばらく二人は見合っただまま。

だが、恵理がじれて、椅子から立ち上がって教室を出ると、柴山の方に向かった。

柴山はくるりと背を向けて立ち去ろうとするが、恵理は素早く柴山の腕を掴む。

「何逃げようとしてんのよ」

「何の用だよ。お前うざいぞ」

柴山は口ではそう悪態をつくが、観念したように振り返る。

そして、恵理の手を振りほどいて、恵理に向き直った。

恵理は身長の高い柴山を見上げ、柴山を睨みつける。

そうして向かい合っていると、恵理は顔がかわいいだけに、柴山はかすかに罪悪感を感じていた。

「私がどうしようとする私の勝手よ」

「じゃあ、俺にだって拒否権があるだろ」

「お互いの意見がぶつかり合う時、力の強い者が勝つ」

恵理はそう言うと、柴山の手を引いて、教室に連れて行くのだった。

要するに、柴山は恵理に逆らえなかったということだ。

「で、何だよ」

柴山が恵理の隣の空席に腰をおろす。

「柴山、数学がわからん」

恵理はすぐに用件を言う。

「俺もわからん」

柴山も即答した。

「……………」

教室にはしばしの沈黙がおりた。

「何でわからんのじゃー！ お前理系クラスだろうがー！」

「うるさい！ 理系クラスだからって数学が得意と誰が決めたー！」

沈黙を破つて、恵理がバシンと机を叩いて、立ち上がり、柴山を怒鳴りつける。

柴山も負けじと立ち上がって、恵理に怒鳴り返した。

可南子は、そんな二人をおもしろそうだという笑顔で眺めていた。

「数学できなかったら理系クラスやってけないじゃないのよ」

「数学なんかある程度できりゃやってけるっつーの」

「私はそのある程度もできないのよ。現に今も教科書見たってさっぱりなのよ。だから『それなり』を教えて、柴山」

「だから何で俺がそんな面倒なことをしなきゃなんねえんだっつーの」

何となく落ち着いてきたのか、二人はまた座り直して話し合いを続けていた。

この二人のテンションはわからんなあと、可南子は二人の様子を見ながら思っていた。

落ち着いてきたのなら、明日の数学のテスト範囲の問題集でも解いておこうかな、とも考えていた。

「ほら、こうしてる間にもどんどん貴重な時間が過ぎてるわ。あんたも明日テストあるでしょ。勉強とかしないの」

「別にお前に心配されなくて俺は俺でやるっつーの」

「その勉強のついでにさ、私にも教えてよ。つつーか、やってるト
コ見せてくれるだけでいいから。ほら、その黒板で」

「何でそんな公で問題解かなきゃならねえんだよ。ふざけんな。だ
いたい問題集に基本的な解き方とか例題とかあるだろ」

「だって例題つてほしい簡単なものじゃない。簡単すぎて、テス
トでなんか絶対使えないじゃない」

「お前本当に高校生か？ あれを応用して問題解くんだろうが」

「それができないのよ！」

「何偉そうに言ってるんだよ。自分ができないからって八つ当たりす
んじゃねえよ！」

「じゃあ、あんたこれできんの？ ほら、ここの問8よ。何でこれ
の面積求められるの？」

「ああ？ ちょっと貸してみる。ほら、こうやって線ひけばわかる
だろ。ここが直角で、こことここで三角形ができる。こことここも
平行でこつちと角度同じだからこことここが長さが一緒。それなら
三角形の面積が求められて、あとはそれを足し合わせればいい。何
でこんな簡単なのがわかんないんだ」

「なるほどー」

恵理が柴山の言うことを、傍らのノートに書き込んでいた。

柴山はここで、自分が見事に恵理にはめられたと悟った。

「お前……………」

「いやあ、助かった。次はさ、これなんだけど……………」

恵理がまた次の問題を柴山に指し示した。

柴山は観念したように、ため息を吐いた。

「……………どれ」

柴山は結局恵理の勉強に付き合うことになった。

「大山、何にやついてんだよ」

「ん？ そんなつもりはなかったんだけど？」

「いや、明らかに顔が笑ってるって」

「仮にそうだとしても、あんたにはどうでもいいことだから気にしないでもいいよ」

「俺にはそうは思えないんだが」

「自意識過剰なんじゃない？」

「……………そうかい」

「柴山、そんなことよりこっちの問題どうすんの？」

「どうすんの？ 柴山君？」

「……………ああ、これはだな……………」

柴山は、たぶんこいつらには一生勝てない気がする、と思った。

肝試し

「なあ」

「うん？」

「今日は何があるんだ？」

「何って……」

恵理は周りを見回して、質問してきた柴山を呆れた顔で見た。

「何やるかわからないのに、来たの？」

「いや、俺は来るつもりなんかなかったんだが、あいつに無理矢理連れてこられたんだよ」

と、柴山はいらついた顔をして、何やら忙しそうに動いている可奈子を指差して言った。

可奈子はそれに気づいて、にやにやしながら恵理達に近づいてきた。

「だってせっかくクラス合同でするイベントだからさ、みんなないないよね〜」

「ね〜」

恵理も同調して、笑顔で首を傾げて言う。

「いや、っていうか、何でお前俺の家知ってたんだよ。気持ち悪いぞ」
柴山はひきつった笑みで二人を見ていた。

「それはそうとお二人さん、このくじをひいてくださいな。ペア決めするから」

可奈子は柴山の問いは無視して、二人の目の前に細長い紙が出ている握り締めた手を出した。

「はいはい〜」

「いや、だから何するんだよ」

恵理がさっそく差し出されたくじをひこうとすると、柴山が慌てて聞いた。

「あ、そういえば言っただけじゃなかったね」

今度は可奈子は無視をせずに答えた。

「夏定番の肝試しだよ！」

恵理は嬉しそうに両手を握り締めて言った。

「……………は？」

柴山は呆然として聞き返す。

「クラス合同で何をやるかと思えば……………肝試し？」

「クラス合同でやるからおもしろいんじゃない！」

可奈子も恵理につられて、拳を作つて力強く言った。

そこで柴山は納得がいった。

恵理達のいるB組と、柴山のいるD組には、それぞれ学年では有名なお祭り人間がいる。

B組は大山可奈子で、D組は菊池俊一きくち としかずという男子だ。

彼らはクラスでも中心的な存在で、常に何かを率先してやっていた。

またクラスモノリがよく、D組の理系クラスに関しては、女子の多いB組と絡めるといっただけでやる気満々だった。

そして、中心的存在の二人が幼なじみで気が合うというのだから、このような巡り合わせはないだろう。

「……………なるほどな」

柴山はそこまで考えに至り、納得の言葉を渋々ながら口にした。

「というわけで、ひけ」

可奈子は笑顔で、ぐいと手を差し出した。

なんだかその笑顔を柴山はそら恐ろしく感じたが、言われるままにくじを一本ひいた。

「……三番」

「恵理もひいて〜」

可奈子は恵理にも差出し、恵理は喜々としてくじを勢いよく引き上げた。

しかし、その顔が少し曇った。

「……三番」

恵理は柴山と同じ番号を引き当てたのだ。

「よし、二人ペアね!」

可奈子は二人の肩を手でそれぞれ叩く。

二人の顔は冴えない。

「可奈子……あんた何かした……?」

恵理は手に持っているくじをひらひらと振りながら、可奈子を疑わしげに目を細めて見た。

「じゃ、始まるまで待っててね〜」

可奈子はそれだけ言って、どこかに去っていった。

恵理と柴山はどうしようもなく、ただ手にあるくじを見つめていた。

「……まあ、よろしく、柴山」

恵理は柴山の肩に軽く手を乗せた。

「……ああ」

柴山は小さくため息を吐いて、それだけ答えた。

そしてついに肝試しが始まり、くじに書かれた番号順に出発した。恵理と柴山は三番目なので、すぐに順番が回ってきた。

「さあ、出発してください！」

出発口である森の入り口にいる可奈子が、明るい声で二人をうながした。

二人はじつとりした目で可奈子を見ながら森に入っていた。

しばらく真つ暗な森の道を進んでいた二人だが、恵理がたまりかねて立ち止まり、口を開いた。

「柴山、さつきから私の服の裾をつかんでるその手は何ですか？」

柴山は、恵理の言葉に小さく体を震わせた。

「あ、い、いや、これは……」

柴山は声を出すものの、言葉が出てこない。

恵理はそんな柴山を見て、顔を歪めて、何かを察した嫌味な笑みを浮かべた。

「柴山、さては怖い？」

「バ、バカヤロー！ そんなわけあるか！」

柴山はすぐに手を離し、顔を赤くして言い返した。

だが、逆にそれは恵理の言葉を肯定していた。

恵理はますます意地の悪い笑みを濃くした。

柴山は激しく嫌な予感を感じ、失敗したと心の中で嘆いていた。

「まあ、別にいいんだけどさー」

恵理は前を向いて歩きだした。

柴山は恵理のすぐ後ろをついて歩いてきた。

そして少し歩くと、また恵理の服の裾をつかんできた。

恵理はそれがおかしくてたまらなく、つい悪戯心が芽生えてきて

しまった。

「柴山、こういう話知ってる？」

「な、何だ？」

恵理が急に低い声で話しかけてきて、辺りをうかがいながら歩いてきた柴山はまた小さく震えてそう返した。

恵理は柴山の返事を受けて、とつとつと語りだした。

「ある大名が供を連れて年始まわりに出た途中、茶店に立ち寄りました。

茶店で休んでいるうちに、家来の関内という若党が、喉が乾いたので大きな茶飲み茶碗に茶を一杯くみました。

その茶碗を手に取り、関内が何気なく茶碗の中を見ると、茶の中に自分の顔ではない顔が映っています。

関内は驚いて辺りを見回しましたが、自分の側には誰もおりません。茶碗の中にある顔は、どうやら若い侍のようです。

その顔はなかなかの美男で、女のように優しい顔をしていました。

怪しいものが現れて関内はほとほと困り、その茶を捨てて、茶碗の中を改めてみました。

しかし茶碗には何の細工もなく、ごくありふれた安茶碗です。

関内は別の茶碗を取って茶をくみかえましたが、やはり先程の顔が現れます。

新しく茶をいれかえてもらっても、その見覚えのない顔は現れ、今度は関内を馬鹿にしたような笑みをうかべていました。

関内はそれでもじっと心を抑え、顔の映っている茶をそのままぐくくと飲み干してそれから出かけました。

同じ日の夕方のこと。

関内が主人の屋敷に詰めていると、ふいに見も知らぬ一人の客が音もたてずに、すっと部屋の中へ入ってきました。

関内はぎょっとして驚きました。

客は立派な身なりの若い侍で、関内の前にぴたりと座ると、軽くお辞儀をしてこう言いました。

『式部平内と申す者でござるが、今日初めてお目にかかり申した。貴殿、某をばお見知りなさらぬようでござるな』

関内はその顔を見てあつと驚きました。自分の目の前にいるのは、今日茶碗の中に見たあの幽霊だったので。

かの幽霊がにやにや笑っていたように、この客もにやにや笑っています。

が、笑っている唇の上にある両眼は瞬きもせずじつて関内を見据えています。

それは、関内に戦いを挑んでいるのであり、同時にまた関内を侮っているでもありました。

関内は心の中では怒りながら、しかし声だけは静かに知らぬと言いました。

そして、屋敷へどう忍び入ったのかうかがいたいとも。

覚えていないのかと、客はいかにも皮肉な調子で言うと、少し関内に詰め寄ります。

『しかし、貴殿は今朝、某をひどいめに合わせたではござらぬか』
関内は素早く腰に差していた小刀に手をかけると、相手の喉笛目がけて激しくついてかかりました。
しかし何の手応えもありません。

途端に相手は音もたてずにさつと壁際に飛びのいたと思うと、壁をすつと抜けて出ていってしまいました。

その壁には、出ていった跡らしいものは何も残っていませんでした。関内がこのことを報告した時、仲間の者は驚いたり不思議がったりしました。

それがあつた時刻には、誰も人の出入りした姿は見なかったし、『式部平内』という名前を知っているものは一人もなかったからです。あくる晩、関内はちょうど勤務が休みだったので、家にいました。

すると夜のかなり遅い時間に客が来ました。

関内が刀を取って玄関へ出ていくと、刀を差した侍が三人立っていました。

三人は関内に丁寧な言葉を下げると、中の一人がそれぞれの名を名乗り、式部平内の家来だといいます。

彼らが言うには、昨晚彼らの主人は関内に小刀でうちかかってこられ、そのために深い傷を負ったので、養生に湯治にいくとのことだった。

『来月十六日にはお帰りになられる。その時はきつとこの恨みを晴らしますぞ』

と、関内は言葉の終わるより先に、いきなり大刀を抜いて飛び掛かると、客目がけて左右に切りつけました。

が、三人の男は隣の家の土塀の脇へさつと飛びのき、そう思う間に土塀を乗り越えてそのまま……」

「……そのまま？」

柴山が問うと、恵理は急に声の調子を変えて言った。

「あれ、知らない？ 茶碗の中。この続きはないのよ。皆さんの想像にお任せしますって」

「そ、そうなのか……」

柴山は小さな声でそう返すだけで、いまいち反応が良くない。

いや、恵理にとってはある意味良い反応だった。

「これが私は小学生の時から気になってね。どうなるのかわかって色々考えてたよ」

「へえ……」

柴山の返事は虚ろになっていた。

恵理はさらに続ける。

「私はね、たぶんこの後関内は少し追っ掛けるんだけど、やっぱり逃

げられて、十六日に四人が来るのよ。で、この後に恐い感じなるのか、後引きずる感じになるのか、ほのぼのになるのかってことよ。だいたい、何で関内がこんなめにあってるのかって話にもなるし。だいたい、二人の名前にそれぞれ『内』が入ってるのも気になるわ

……」

そこで恵理は立ち止まり、柴山の方を向いた。

服の裾をつままれているので、完全には振り返れないが。

「一応侍だから、式部平内と関内の一騎打ちになるんじゃないかと思うのよ。あー、でもどうい風に戦うか、私じゃ全然わからないわ。でもね、こういう場面があったらおもしろいと思うのよ。関内が夜道を歩いてて、ふと気配を感じて後ろを振り返るとそこには……！」

「わー！」

「うあああああああああ！」

辺りに柴山の叫び声が響き渡った。

そして、限界まで声を出すと、その場に膝をついた。

恵理の言葉の終わりに両肩を軽く叩き、驚ろかした犯人め驚いて、その場にたたずんでいた。

恵理だけが笑いを必死にこらえようと口を押さえながら、その犯人に、ナイス！とばかりに親指を立てた。

「……さすが菊池君。ナイスなタイミングだったわ」

とりあえず笑いをおさめた恵理が口を開いた。

菊池と呼ばれた、白い布を被った男子は、布を取って顔を出した。

「いや、正直ここまで驚かれるとは思わなかったな。佐藤、何したの？」

菊池は苦笑いを浮かべ、恵理と柴山を交互に見ていた。

「私はただ楽しくやろうとしただけよ。それより、脅かし役が今出てきたってことは折り返し地点が近いのかな」

「そうそう。その神社から並んでる蠟燭を持ってくればいいから

……が、頑張ってるね」

最後に菊池は柴山を気の毒そうに見て、持ち場に戻った。

「さ、柴山行くよ!」

恵理は柴山を支えて立ち上がらせると、ずんずん歩き、さっさと道に戻っていった。

柴山は、終始無言で恵理の手首を強くつかんで歩いた。

二人が戻ってくると、待機していた皆が驚いたような顔をしていたが、恵理と可奈子だけは誇らしげな笑みを浮かべていた。

肝試し（後書き）

参考『怪談 - 小泉八雲怪奇短編集 -』 平井呈一訳 偕成社文庫

「じっ」遊び

「柴山」

「ん？」

恵理に声をかけられ、柴山は顔を上げた。

「おお、ロミオ、ロミオ！ どうしてあなたはロミオなの？」
「……………」

いきなり何を言い出すんだ、という顔で、柴山は恵理を見た。
恵理は一瞬柴山を見るが、構わず続ける。

「……………私の敵といっても、それはあなたのお名前だけ、モンタギューの名を捨ててもあなたはあなた。ロミオ、その名をお捨てになって、あなたと関わりのないその名を捨てた代わりに、この私を受け取って」

「……………受け取ります、お言葉どおり。恋人と呼んでください。それがぼくの新たな洗礼、これからはもう決してロミオではありません」

柴山は、渋々と続く台詞を口にした。本当に嫌そうに、抑揚のない声で。

恵理は嬉しそうな笑顔を浮かべ、さらに台詞を続けた。

「どなた、夜の暗さに潜み、この胸の秘めた思いをお聞きになったのは？」

「ぼくが何者か。名前を聞かれてもどうお答えして良いのやら。ぼくの名前は、聖者よ、我ながら憎らしい、というのもそれがあなたの敵だからです。書いてあればその文字を引き裂いてしまいたい」

「そのお口からの言葉を私の耳は百とは飲み込んでいません、でもお声でわかります。あなたはロミオ？ モンタギュー家の」
「いいえ、聖者、どちらの名前もお気に召さぬ以上」

恵理の台詞が、少し途切れる。訝しげに柴山を見た。

柴山は、その視線を感じて、こちらも何だ、とばかりに眉をひそめて恵理を見る。

だが、恵理はその後すぐに台詞を続けた。

だが、声の調子に、少し訝しく思っている調子が表れていた。

「……………どのようにしてここに？ なんのために？ 庭の塀は高くて乗り越えるのは難しいはず、それにここは、あなたのお身を考えてると、この家の者に見つかれば死の入り口となりますよ」

「恋の軽い翼でこの塀は飛び越えました、石垣などでどうして恋をしめ出せましょう。恋がなしうるのならどんな危険も恋はおかすもの、この家の者がどうしてばくを妨げられましょう」

「……………気持ちわる！ 何でそんなスラスラ台詞出てくるのよー」

ついに恵理は耐えられない、と言うように大声を出して遮った。

「はあ?! お前が最初に振ってきたんだろうが！ 言って悪いから！」

柴山も恵理の言葉に怒鳴って返す。

「いや、まさかノってくれるとは思わなかった」

ここで、恵理は急に声を落とした。

柴山も、急に勢いを落とす。

「……………いや、まあ、何となくな……………」

口の中で、何やら言葉を濁した。

恵理は気にせず、嬉しそうに話し始める。

「ねえ、今度は何がいい？ 甘い台詞吐かせたいから、メルヘンで

もいってみる？」

「やめる！ もうやらねえよ！」

柴山は力いっぱい拒絶した。

「何やってんの、彼らは」

偶然通りかかった菊池が、教室にいる可南子に声をかける。

お馴染みの、非常口にいる恵理と柴山を指差して。

「ロミオとジュリエットらしい」

可南子は、柴山と恵理の様子を楽しそうに見ながら答えた。

「うん、そりゃわかるんだけどさ」

「いつものことよ」

可南子のあっさりとした答えに、菊池は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ああ……そうなの」

しかし、菊池が恵理と柴山を見続けているのが気になり、可南子は声をかけた。

「なに？」

「いや、今度の学校祭、あいつらが演劇やればいいのにな〜って」

菊池の呟きに、可南子は数瞬黙った。

「……………いいね」

参考：白水社シェイクスピア全集『ロミオとジュリエット』（白水

u
ブックス
(

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
9
/
2
2
*
*
*

十五夜

「……………」

柴山は自分の家の玄関の前で固まっていた。

それは、目の前に笑顔の恵理、可南子、やや苦笑いをうかべた菊池がいたからだった。

「……………何でここにいるんだ」

「柴山ー、今日何の日だか知ってる？」

恵理は嬉しそうに尋ねる。

その手には、双眼鏡が握られていた。

「……………知らねえ」

何となく察したが、柴山はわざと知らないフリをした。

だが、恵理は気にした様子はなく、むしろさらに嬉しそうな笑顔で言った。

何やら、その笑顔は勝ち誇ったようなものにも見える。

「むふふー、今日は十五夜なのだよ、君」

「だから何だっけ言うんだよ」

柴山は何だか悔しくなり、少し怒ったように言い返した。

「十五夜にお月見スル、これ日本人の心ネ！」

「何いきなりエセ中国人みたいな喋り方になってんだよ！ お前そんなキャラじゃねえだろ！」

「柴山、恵理は満月で気が高ぶっているんだよ」

可南子が静かに付け足す。

「いや、普通の人間としてどうなんだ、それ。狼男か」

「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。十五夜だからお月見し

よってみんなで誘いに来たんだ」

「最初からそう言えよ」

「言っても、柴山は断るところか、何も言わずにドア閉めると思ったから、ちよっと引き伸ばしてみた」

「……あー、そーかい」

柴山は、あくまで嬉しそうに話し続ける恵理に対して、言い返すのもめんどろになり、だんだん言葉に力が入らなくなってきた。

「そういう訳で、あの丘までダッシュだ！ 柴山！」

「しねえよ！ どの丘だよ！」

「学校の裏だよ」

菊池が、柴山を哀れに思ったのか、優しく言った。

「あ、そうか」

柴山は敏感に同情を察知し、また力なく返事した。

そして、四人は学校の裏にある小高い丘に着いた。

「今夜は晴れてよかったねー。よく見えるよ」

恵理がさっそく手に持っていた双眼鏡を月に向け、覗き込んでいた。

「あ、そういえば、持ってきたものがあるんだ」

そう言つと、菊池は肩にかけていたリュックをあさり、中から包みを取り出した。

「何？」

恵理は双眼鏡から目を離し、隣にいた可南子も、興味深そうに包みを見る。

「さて何だろうね」

菊池も笑顔で包みを開け、皆の前に置いた。

中身は、醤油ダレのかかったみたらし団子だった。
恵理と可南子の顔が輝いた。

「わぁ！ お団子だ！」

「やった！ 私、としのおばさんのお団子好きなのよ！」
それぞれに嬉しい反応をする。

そして、すぐに団子を一串取る。

「柴山君もよかったら食べて」

菊池は、黙って見ていた柴山にも、団子を差し出した。

「……………どうも」

柴山は素直に団子を一串取った。

柴山と菊池は、同じクラスだが全く接点がなかった。

だから、どうもぎこちないのだが、恵理が柴山に絡んでくるようになって、可南子も柴山に絡むようになった。

そのせいか、菊池の態度がだんだん打ち解けたものになっているような気が、柴山はしていた。

「で、ここまで来て何するんだよ」

柴山は団子を食べ終わると、恵理に向かって、そう言った。

「何って……………お月見するんだよ」

恵理は何を今更、という顔で柴山を見て、自分も団子を食べ終わると、さっそく双眼鏡で月を見出した。

「……………」

柴山は、また黙ってしまった。

もう、何も言い返す気力もない。

しばらく黙って月を見ていたが、可南子が口を開いた。

「柴山君、暇だから何かうんちく言ってよ」

「うんちくつて何だよ。なんで俺がお前の暇つぶしにならなきゃいけないんだよ」

柴山は不機嫌そうに返す。

「ただこうして黙って月見てるのもなんかね。ちょっと豆知識なんかあったら、有意義なと思うのよ。いつも恵理とうんちくの言い合いっこしてるんだから、なんかあるでしょ」

「あれは、うんちくなのか……？」

「私も知らなかった」

恵理は、月を見ながらも話を聞いていたようで、柴山に続いて口をはさんだ。

「……まあ、んなことはいいから、ほら、何かお願い」

可南子は半ば呆れながら、半ばどうでもいいと言っようなやる気のない口調で言った。

「……じゃあ、月に関する事が……」

可南子の言い方に、柴山は何か言いたそうだったが、素直に言うことをきくようだ。

菊池は、柴山に同情の念を禁じえなかった。

柴山はこれみよがしに、一回大きいため息を吐くと、淡々と話し出した。

「月。目視で確認できる地球唯一の衛星。平均公転半径384,400キロ、離心率0.0549、公転周期27日7時間43.7分、表面積3,800万平方キロメートル、質量7.347673×10²²キログラム、平均密度3.344g/cm³、自転周期は公転周期と同じ。表面温度は、最低40K、平均250K、最高396K」

そこで柴山は言葉を切った。

「^{ケルビン}Kつて何だっけ？」

また恵理が双眼鏡を覗きながら問うた。

「Kは熱力学によって定義される温度のひとつ。熱力学的温度と呼

ばれることも多い。絶対零度の基準点が存在するため、絶対温度とも呼ばれてきた」

柴山は、ひたすらに教科書的事項を言った。

またそこで沈黙。

そして、可南子が口を開いた。

「……………つもらん」

一瞬その場の雰囲気は凍った。

「何だその言い草！ 人がせっかく知識フル動員で言ってやったつてのに！」

当然のことながら、柴山は可南子に怒鳴った。

菊池は、もう苦笑いを浮かべて二人を見守るしかできなかった。

「なんかさ、もっとこう風情ある知識はないわけ。お月見に関係することか」

「……………」

言われて柴山は黙った。

恐らく、何かないか考えているのだろう。

菊池は、柴山は見た目に反して素直なヤツなんだ、と確信した。

「……………月見とは、満月など月を眺めて楽しむこと。観月とも言う。

狭義には、太陰太陽暦の八月十五日、十五夜と、九月十三日、十三夜の夜の月見を指す。この夜は、月が見える場所などに祭壇を作りすすきを飾って月見団子・里芋・枝豆・栗などを盛り、御酒を供えて月を眺めた、豊作を祈る満月法会などをした。このことから芋名月とも言う。中国でも同様の習慣があり、月餅を作ってお供えする。日本に伝わって、月見団子に変わったという。韓国でも、この時期、月見の習慣があり、チュソクといい、仕事も休みになり、故郷で親族と共に祝うお正月、お盆に次ぐお祭りになっている。ソンプジョンというお菓子をつくる。十三夜は日本独自の風習であり、ちょうと食べ頃の大豆や栗などを供えることから、この夜の月を豆名月また

は粟名月という。十五夜と十三夜どちらか片方の月見しかしないのは「片月見」と言つて嫌われた。秋や冬は空気が乾燥して月が鮮やかに見え、かつ、秋は湿度も低く夜でもそれほど寒くないため、名月として鑑賞されるようになった。中国、日本では、月を愛でるという習慣が古くからあり、日本では縄文時代ごろからあるといわれ、平安時代ごろから中国から月見の祭事が伝わると、貴族などの間で観月の宴や舟遊びなど歌を詠んだり酒を飲んだりした。これでどうだ

柴山はやりきった、という顔で可南子を見た。

「うん、まあまあね。ご苦労さま」

可南子の横柄な口ぶりに、柴山は唇を噛み締めて睨みつけた。

「柴山君すごいな！ おもしろかったよ！」

菊池は慌ててそう口にした。

それで柴山もとりあえずは納得することにした。

菊池は、扱いやすくてよかった、と胸をなでおろした。

「ねえねえ、他に何かない？ あ、月に関して。かぐや姫の話とか

……」

「もついい加減にしろつての！」

菊池はここではあえて止めない。

菊池も、柴山が何かまた言ってくれるのではないかと期待しているからだ。

「あー、お月様、雲に隠れちゃった」

恵理はそう言つて、残念そうにゆっくりと双眼鏡を目から離れた。

そして、柴山達の方を振り向く。

「そろそろ寒くなってきたから、家に帰ろうか？」

「あ、帰る？ 満足した？」

「うん、ありがとう」

「おい待て。これは佐藤が言いだしたのか？」

可南子はそれが何だ、というようにうなずいた。

「そうよ。でなきゃ、わざわざこんなトコまで来ないわよ」

「……………」

何で俺まで、とか、よくお前ら付き合えるな、とか色々言いたいことはあったが、柴山は結局何も言わないで黙った。

菊池が意味ありげな視線を柴山に向けたからだ。

何となくここで、柴山と菊池は通じ合った。

そして、四人は丘を後にした。

Wikipediaより情報拾いました。

RAN **2006/10/31**

同じことを祈れる喜び

「柴山！」

「佐藤！」

神社の前で、二人は互いを指差して立っていた。

「ん、恵理、この人が待ち合わせしてるって言ってた友達？」

恵理の横にいた女性が、柴山と恵理を交互に見て言った。

恵理を挟んで立っていた男性が、急に目つきをきつくして柴山を見た。

柴山は一瞬たじろぐ。

恵理は、隣の女性の言葉に苦笑いを浮かべた。

「いや、違うんだけど……うん、まあ、それでもいいけど」

「待て。俺は良くないし。そんな予定はないし」

たじろいだものの、恵理の不穏な言葉に、思わず柴山はツッコミを入れてしまった。

「まあ、いいじゃん。ついでに、一緒にお参りしようよ」

「……………」

柴山は返事に詰まった。

さつきから、恵理の隣にいる男性が柴山を見る目がどうにも痛いのだ。

そんな状況に進んで入っていきたくはなかったので、何とか断る理由を柴山は考えた。

「……佐藤、もしかして家族と一緒に来たのか？ そしたら、俺が邪魔するわけにもいかないし……」

「ああ、紹介してなかったね。私のお父さんとお母さん」

柴山の言い訳を遮って、恵理がそれぞれ両脇にいる男性と女性を指し示して、そう言った。

「いや、だから……」

「ああ、もつづるせえ。とつとと行くぞ。男が四の五の言うんじやねえよ」

柴山がさらに何か言おうとしたら、惠理の隣にいた、惠理の母が、急に声音を低くして、柴山の首根を掴み、無理やり歩き出した。

惠理と、惠理の父も、それについておとなしく歩き出した。

惠理は何だか機嫌よさげに、笑顔でいる。

柴山は訳がわからず、ただ惠理母の迫力に負けて、なすがままになっっていた。

そして、神社の前に行く。

新年になると、神社は中を開けているので、ご神体が見えた。

ご神体はだいたい鏡であることが多く、ちょうど日の光が入り込み、眩しく輝いていた。

まさしく、神が具現化したように見えた。

すると、隣の佐藤一家が賽銭のための小銭を出す気配がした。

柴山もならって、慌ててポケットの財布から五円を出した。

「……ご縁がありますように……？」

それを目ざとく見つけた惠理は、冷めた口調で言った。

「何か悪いかよ」

「私は二十五円入れるわ」

「何だよ。ダジャレかよ、ってツッコミじゃないのか」

「いや、ダジャレは重要よ。結局昔の人の風流と言った歌だっつて、要するにダジャレじゃない」

「ってか、ダジャレじゃねえよ。失礼だろ」

「とりあえず、賽銭なんて神社への寄付なんだから、やっぱ多いに越したことはないでしょ。額が少ないなんて、感謝の気持ちと、慈愛の気持ちが足りないのよ」

「お前、新年早々俺に文句たれたいのか？」

「あー、ごめんなさい、こういうの気になる性格だから」

「うつせーぞ！ さっさとお参りしろ！」

また恵理母の叱責が飛んだ。

恵理と似た、かわいい顔をしているのに、迫力が全く違った。

この人は元ヤンキーなんじゃないだろうか、と柴山は自分の経験則から思っていた。

そして、恵理の父からも、同じような匂いを感じていた。

気分を変えて、心静めて祈りをする。

手を合わせ、目を閉じると、途端に世界から自分を隔離したように感じる。

まずは感謝の意を述べ、ふと、今年は何をお願いしようか、と考えた。

自分は今年何をしようと思うのだろう。

考える人は考えるのだろうが、別にまだ受験を考える時期でもないし。

特別に何かしたい、と思うこともなかった。

やりたいことは、その時その時であったから。

ふと、学校にいる人々のことを考えた。

そう、自分は彼らがいたから、学校生活にハリが出たように思えた。

それなら 彼らが幸せでいることを願うのも、いいかもしれない。

できれば、みんなもそう願っているといい、と思いつつ。

そして、お参りを終えた佐藤一家と柴山は、共におみくじを引いた。

「やった！ 大吉！ 柴山は？」

「……末吉」

「地味ー」

「別におみくじに、地味とか派手とか関係ないだろうが」

「でも、自分でも、パッとしないな」思ってたでしょ」

「……………」

柴山が凶星をつかれ、一瞬の沈黙ができたところで、声がかかる。

「じゃあ、恵理、私達先に帰るよ」

「うん、ありがと。そんなに遅くならないから」

恵理が軽く手を振ると、恵理の両親は車に乗って、去っていった。

恵理の父は、相変わらず柴山を睨みつけていたが。

「柴山、ほら、高受かりますようにだつて」

おみくじをくくりつけた場所で、恵理が何気なく言った。

「ふーん……って何やってんだよ、お前は」

危うく生返事を返しかけた柴山は、何かおかしいことに気づいて、恵理を見た。

「いや、見えちゃうじゃん、絵馬とか」

そう言う恵理の視線を柴山がたどると、いくつかぶら下げられている絵馬があった。

「そういうのさ、見えてもあえて見ないふりとかするもんじゃねえの？」

絵馬を手にとって見ている恵理を、柴山は呆れた目で見ていた。

「いいじゃん、減るもんじゃないし」

「減るかもしれないじゃないか」

「何が」

「よく、願い事を人に言ったら叶わなくなるって話あるじゃん」

「それは、あんまり言いすぎたらやりたくなくなることがあるから、戒めてるんじゃないの？」

「……でも、願い事っていうのはプライベートなことだから、やっぱりあまり見るのは……」

自信がなくなってきたのか、柴山の声が少し小さくなる。

間違っただことを言っているわけじゃないのに、何でこんなに自信がなくなるのだろうと、柴山は不思議に思った。

「そんなの、こんな公の場所にさらした時点で、見られる可能性は仮定されるべきだよ」

「……しかし、見るなんて思わないだろう、あんまり」

「見ないだろう、はだめだよ。そういうのは、数パーセントでも見る確率があるってことだもの」

「……そうだな……」

「私の勝ちだ。まいったかね」

「別に勝負してたわけじゃねえし」

「本当にどうでもいい感じに言うのが腹立つね」

「そりゃどうも」

「……」

「で、どうすんだよ」

何となく、恵理と柴山は神社の鳥居の前に立っていた。

「いや、可奈子と待ち合わせしてたんだけどね」

「何時、とか言っただけだったのかよ」

「まあ、お昼ぐらいには会えるよねーって。たぶん菊池君と一緒に来るだろうからって」

「なんだよ、そのアバウトさ」

「何横文字使ってるのよ」

「今、それ関係ねえよな？」

「そうだけど、どうしようもないから、ツッコんでみた。しばらく付き合っつてよ」

「…………アバウトするのは、お前、すでに日本語化してんだぞ。辞書ひいたら載ってるんだぞ」

「私にはないもん」

「なんだそれ、余の辞書にはないってヤツかよ」

「家にある辞書古いから」

「高校生にもなって、自分の辞書買えよ。親のお古使ってんじゃねえよ」

「お古って今時言うヤツ、いないよね」

「そこで、柴山の言葉が少し止まった。」

「…………なんか疲れたから、話題変えていいか」

「どうぞ」

「いや、俺ネタないから、なんかフツてくれ」

「何、自分で言つといて、相手に話題求めるの」

「なんか、とりあえず話題を変えてほしかったんだ」

「しょうがないな…………あ、ーチだ」

「待て。伏せなきゃならないから、固有名詞はやめてくれ」

「うん、今見事に伏せられちゃった」

「ああ、ちよつと一部分だけ聞こえづらくなつたよ」

「まあ、それはいいけど、マ チってかわいいよね」

「ああ、もうこのままいくのか」

「うん、ネタないし。で、かわいいよね」

「うーん…………まあ、丸っこい所がか？」

「うん。なんか、全体的に。目も丸いし、お尻も、なんかかわいげあるよね。小さいけど、普通車で馬力あるつても素敵」

「目とかお尻って…………目つてのはライトか？ お尻…………は、まあわかるけど」

「なんかライトって目みたいに見えない？」

「見えないこともないが」

「ツンツンしたヤツとか、たれ目とかさ」

「ジープみたいに、真ん中にあるヤツはどうすんだよ」

「あれは鼻だよ」

「黄色い鼻かよ」

「いいじゃん」

「……佐藤って、車好きなのか？」

「なんか見てるの楽しいんだよ」

「意外だな」

「もっと乙女な趣味があると思った？」

「いや、何となく興味ないと思ってただけ」

「柴山はどうなの？」

「逆に、そんな興味ない。どうでもいい」

「それはそれで意外」

「そうか」

「そういえばさ、昔は北海道の車って、寒冷地仕様車って結構でかく書いてあったよね」

「まあ、今もあるヤツはあるけどな。あんまでかく表示されなくなつたよな」

「ぶつちやけ、見えないよ」

「それがどうしたんだよ」

「いや、北海道って、車の作りも違うんだよなーって」

「なんか、北海道だけ外国みたいな扱いされるもんな、たまに」

「そんぐらい、気候も違うってことなのかな。熱帯地仕様車とかあるのかな」

「それは行かないとわからんだろうな。でも、その土地で試験はしてるだろ」

「個人的には、寒冷地の試験場がなんかかっこいいなと思うんだけど」

「別に関係ないだろ」

「いや、山越えたり、スピード実験したり、吹雪実験したり……マ

イナスの中、雪撒き散らして
「撒き散らしてはどうなんだ」
「とにかく、かつこよくない？」
「あー、そうだな」
「どうでもいいでしょ」
「どうでもいい」
「あー、それにしても可奈子遅いなー。日傾いてるよー」
「ったく、ただでさえ冬で日傾くの早いつてのによー」

一方その頃、鳥居から神社の中に入ったところにある、売り場では。

「可奈子、佐藤に声かけないのか？」

「いやー、なんか柴山と仲良く話してるからさー」

「あれ、絶対可奈子待ってて、暇だから柴山付き合せてるだけだつて」

「だけどさ、ここはあえて引き伸ばしてみるんだよ」

「可奈子が何したいのか、俺わからないんだけど。ってか、俺ここにいる意味は？」

「あ、お姉さん、お神酒ください」

「待って。お姉さん、この人未成年です」

「バレやしないって。ね」

だが、そこは巫女さんがやんわりと、ダメです、と断ってくれた。

「ほら。そろそろ……」

「やだー。今年こそ、恵理と柴山を仲良くさせて、ニヤニヤするんだからー」

「そんなお前の野望知らないよ！ もう俺を帰してください！」

この後、菊池の叫びを聞いて、恵理と柴山が二人に気づいたことは、言うまでもない。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
7
/
1
/
8
*
*
*

白々しい

「私、ホワイトデーは特に気にしないの」

恵理はいきなりそう言った。

「あ、そう」

隣にいた柴山は、「で？」と言いたげに相槌を打った。

「だって、お返しなら、バレンタインにチョコもらった時にでも、お返しに何か買いにいこうかとか、飯でもおごるぜ、とか言えば済むじゃん。それができないような仲の人には、元々お返しなんか期待しないし」

「なるほど。でも、そう割り切れるもんでもないだろうさ。だいたい、イベントごとを多くした方が、色々都合がいいしな」

「わかってる。言ってみただけ」

「で、なんで急にそんなこと言い出したんだよ」

「いやあ、ホワイトデーとかうぜえとか思ってたさ」

そう言つと恵理は、目の前で弁当を食べている可南子をじつとりとした目で見た。

「何」

可南子は一旦食べる手を止めて、そんな目で見られるなんて心外だ、という顔をした。

「私は知ってるんだぞ。菊池君が密かに持つてるものを」

恵理の言葉に、可南子の隣で弁当を食べていた菊池も手を止めて、苦笑いを浮かべた。

「佐藤、なんか誤解してないかい？」

「何を誤解してるって言うのさ！ 菊池君の机の横に特別な感じの一つだけ袋に入ったものがあつたって、噂されてるの聞いたんだから！ その袋がホワイトデーのお返しなんでしょ！ バレンタインデーに可南子が菊池君に何かあげてるの見たんだから！ 可南子の嘘つき！ 菊池君とは付き合つてないって言つてたのに！」

「いや、それが大いに誤解だし」

「だって私には何もくれないのに、菊池君には何かあげてるなんて特別な意味がないってんなら何だつていうのさ〜！」

「まるで旦那の浮気が発覚して怒つてる妻みたいだな」

柴山は横で冷めた目で見ていた。

「実はね、恵理……」

と、可南子が急に真剣な面持ちで話しだした。

「霧困気の変つた可南子に対して、その場にいた皆が姿勢が変わつた。」

「としには亡くなつてしまつた妹がいたの」

「え……」

「妹さんは病弱で、としはほとんど毎日お見舞いに行つてたの。そして毎年バレンタインデーとホワイトデーには、プレゼントを交換する約束していたの。妹さんにとって、バレンタインデーとホワイトデーは憧れだったから。本当は恋人と過ごしたいと思つていたのでも、なかなか出歩けなかつたから、相手も見つけられなかつた。だから大好きなお兄ちゃんにプレゼントを贈ることにしたの。もう、自分は病院の外に出ることはできないとわかつてたから。実は私も何回か妹さんのお見舞いに行ったことがあつてね。それを知つたの。そして、妹さんは結局亡くなつてしまつた。だけど、としはホワイトデーに贈り物を送る習慣だけが残つたの。まあ、それも何だから、私ができることしたのよ」

「そうだったんだ……」

「……だったら、すごいよね」

「は？」

「なーんつって。嘘だよ〜ん」

「可南子〜!!」

「なあ、さっきの話、嘘だよな？」

恵理と可南子が騒いでる横で、柴山は小さな声で菊池に問うた。

「なんで聞くの？」

「いや、何となく確かめたい」

「うーん……一部脚色ありって感じかな」

「え」

「まあ、俺らにも色々あるんだよ」

「……お前らって謎だよな……」

柴山は、ひきつった笑みを浮かべて、菊池を見た。

「俺にしたら、柴山も十分謎だらけだけどね」

菊池は、相変わらずの笑顔で何事もないように答えた。

「……………」

菊池の笑顔に、柴山は何も言えなくなった。

RAN

2007/4/5

選挙に行こう

「……………ねえ、選挙キャラクターって、なんかイラつとしない？」
「いきなり何の話だよ」

恵理の唐突な問いに、柴山はもつともな問いを發した。

今、二人は柴山のお気に入りの場所である、屋上前の階段にいる。

「まあ、確かにあのキャラクターなんか好きになれないけど」
だが、すぐ後に、そのようにフォローを入れた。

「でしょ。まあ、いきなりな話題は、いつものことだとして流してよ。そしてさ、今回のポスター、あれ見た？ 泣いて、投票に行つて、とお願ひしてんのよ」
「行つてほしいんだろ」

「うざいじゃん!」

柴山の言葉に、恵理は拳を握り、地面をたたいた。

「まあ、確かに本来投票は自分の意志で行くべきだからな」
「でしょ。そして、国民は行かなければならないと思つべきなのよ」
「だけど、あのポスターあんまりないぞ。むしろ、人気地のものを使つてたぞ」

「まあ、きつとよくないってクレームついたんじゃないの。行きましょつて啓蒙するぐらいならよかつたけど、それがあんな泣いてお願ひなんて。アホかつつーの!」

熱がこもる恵理に、柴山の表情は変わらない。

「まあ、言いたいことはわかつたんだが……………しかしさ、俺ら選挙権ないじゃん」

「……………」

柴山の言葉に、恵理は黙り、沈黙が流れた。

R A N
* * *
2 0 0 7 / 4 / 5 * * *

言葉には気をつけましょう

「ねえ、柴山。放置プレイって何だろう」

恵理がふと呟くように言った。

「何だ、いきなり」

柴山は、怪訝な顔をして、恵理を見た。

「ネットとかでたまに見るの。私、放置プレイっていうのは、Sの人がMの人に何もしいことで不安感を与えて、逆にMの人はそれに快感を感じて、Sの人はそれをにやにや見てるプレイだと思っただの」

「……で？」

柴山は怪訝な表情のまま、先を促す。

「最近ネット上でよくこの言葉を目にするのよ。だから、そんなにプレイ好きが増えたのかと……」

「そんなわけねえだろ」

柴山の容赦ないツツコミが入る。

「わかってるわ。それで、どれだけこの言葉の意味をわかって、使ってる人がいるのだろう、と思ったのよ」

「まあ、みんなわかってるから、あえて使ってみてるんだろ」

「そうであると思うけれど……ちよつと安易に使いすぎな気がしてならないの。本来は敬遠されるべき言葉じゃない。それに、本来の意味から離れてきてる。最近、これだけじゃなくて、他にもそういう言葉があるように思っわ」

「ことわざも、そういうのがあるよな」

「情けは人のためならず、とか？ あれ私未だに品詞分解して意味考えないと、間違っわ」

「それどうなんだよ、お前」

「だって、河童の川流れを、気持ちよく川を流れていく様子、とかいう人がいるらしいじゃない」

「……待て、なんだか話がずれてるぞ」
「ああ、そうだった。で、こんなんでいいのかなって話よ」
「そう、そして俺は、変化するのが言葉じゃないのかって言おうとしたんだっただけ」
「でも、大事にすべきポイントもあると思うのだけど」
「まあ、確かにな」
「放置プレイなんて、公衆の面前では言えない言葉でしょ」
「そりゃ、そうだ」
「でも、ネットでたくさん使ってたなら、いつ普段の言葉でもその言葉を出すかわからないわよね。そしたら、恥をかくことにならない?」
「一理あるな」
「だから、普段から言葉に気をつけるべきだと私は思うのよね」
「まあ、それはいいのだがな、佐藤」
柴山は呆れたように、重いため息をはいて言った。
「ん?」
恵理は何だ、とばかりに柴山を見る。
「早くこの問題解いてくれ。いつまでこうしてるつもりだ」
「嫌だー、めんどくさいー、何この公式を何回も使うヤツー」
恵理は、机の上にかぶさると、駄々をこねた。
「俺だつて暇じゃないんだぞ! いい加減終わらせろ!」
柴山はイラついた表情をして、怒鳴る。
「はい……」
さすがに恵理も悪いと思ったのか、また練習問題に向かうのであった。

若さって何だ

「恵理、なんか親父くさいよ」

机に新聞を広げる恵理に、可南子は呆れたように言った。

恵理は可南子を新聞を見ていたそのままの表情で見る。

「何言ってるのよ。私がこの新聞を学校に持ってくるまでにどれだけ苦労したと思ってるの。父さんとの熱き争奪戦を勝ち抜いてきたのよ」

「いや、家で読めばいいじゃない」

「だから、みんなして読むんだから、朝の少ない時間の中では読めきれないのよ」

「早く起きれば？」

「それができれば苦労はしてないわよ」

「でも、恵理のお父さんが先に読み終わって、恵理がその後の新聞をもらってきた、ということにはならないの？」

「お父さん、読むの遅いんだもん」

「順番にやればいいじゃない。テレビのチャンネルじゃあるまいし」

「新聞は新しいから新聞なのよ！ 朝刊は朝に読まなきゃ意味ないのよー！」

「あー、そうですか」

「私はまだ真面目に全国紙読んでるんだからいいじゃない。その言葉、D組のヤツらに言ってあげなよ」

「ヤツら？」

「行ってみる？」

D組の入り口に来た恵理と可南子。

そこからこっそりと教室を覗き込む。

「ほら、柴山と菊池君」

「ヤツらがどうし……」

最後まで可南子は言わなかった。

柴山と菊池に視線を向けて、可南子の目に映ったのは、菊池が新聞を机に広げ、それを覗き込んでいる柴山だった。

このあいだの席替えで、席が隣になってから、彼らは妙に二人でいることが多くなった。

「しかも、あの新聞何だと思う？」

「んー、何だろう、ちよつと普通の新聞と違う感じ？」

恵理の質問に可南子は目を細めて、新聞を見ようとしますが、遠いし、隠れていてよく見えなかった。

「競馬新聞よ」

「……………あぁ」

恵理の言葉に、可南子は合点がいった、という顔をした。

そういえば、菊池は競馬が中学の頃から好きだった。

馬券は買えないから、テレビ番組の中継を見て、予想をして楽しんでるのだ。

レースがあった日は、必ずその話題を熱く語っていたな、と可南子は思い出した。

「思い当たる節ありありでしょ、可南子」

「それにしても、柴山も競馬好きだったんだね。意外」

「いや、ヤツは興味本位なだけだと思うよ」

「あぁ、あんたもよくそうやって、何にでも首つつこむもんね」

可南子は、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「……………」

恵理は、可南子を睨みつけていた。

原点に戻ろう

「エイズが増えてるらしいね」

「若い人の間で増えてるらしいよ。ずっと言ってるよね」

「こんなに言ってるのに、何で気をつけないんだろ」

「どうせ、やりたい放題やってるからだろ」

「……………」

恵理と可南子の会話に入った柴山の言葉に、二人は絶句した。

「あんた、そこまでズバつと言うことないじゃない」

「まあ、確かに一理あるけどね。なんかもつと大事なものあるだろつていう」

「全くだ。俺は真実を言ったまでだ。つたく、男も女も裏ではやったのやらないだのつて話ばかりでうんざりだ。もつと話すことがあるつてんだろ！」

「どうした……柴山……」

可南子が目の前の菊池を伺いながら、言った。

「お前ら、人が勉強してる横で、気楽に話してんじゃねえよ！」

「柴山ー、イライラしたつて、この文が読めるわけじゃない…………つてか、むしろイライラした方がますますわからなくなるんだから、落ち着きなよ」

恵理が冷えた笑いを浮かべて、柴山と向かい合っている机の上の問題集を指し示した。

「う、うるさい！ だいたい、お前らは勉強しなくていいのかよ」

「俺らは、柴山が終わるのを待ってあげてるんじゃないか」

菊池が笑顔で言う。

「…………菊池…………お前最近性格良くなったよな…………」

柴山がひきつった笑みを浮かべて言った。

「そうかい？ ありがとう」

「皮肉だっつーの!!」

「いいから柴山、早くやろうよ。兼好法師様も怒っちゃうよ」
恵理が頬をぷつと膨らませてみた。

「あー、俺、こういう暇に任せて文書けるようなヤツらの文章って
いまいち理解できなくてなー」

「何庶民派ぶってんの。早くしてー!。私、再放送のドラマ見たいん
だからー。教えてって言ったの柴山でしょー」

「くそー……」

柴山は渋々、また問題に向かった。

「それにしてもさ、下ネタになかなか話が及ばないよね、あんたら
って。面白くないわ。ぶつても動じないし」

可奈子の言葉に、柴山盛大に筆をすべらし、ノートを破いた。

RAN

2007/7/12

部活

屋上に続く階段で、上の段と下の段でそれぞれ本を読む、恵理と柴山がいた。

「佐藤って部活入ってたか？」

「うん、ポジティブ部」

「……………」

何でもないように応える恵理に、柴山が呆れた目を向ける。

「何よ」

「真面目に答えろよ」

「何で答える必要があるのよ。急にどうしたの」

「いや、何となく思ったただけだよ」

恵理に視線を向けられると、柴山は視線をそらした。

「じゃあ、いいじゃん」

「で、実際どうなんだよ」

「帰宅部。部活入ってないよ」

「何で」

「あんたはどうなのよ。何か部活入ってるの？　っつーか、入ってないでしょ」

「まあ、そうだけど」

「たぶん、私と同じ理由でしょ。あんたも」

「何だよ」

柴山は何となく癪に障ったのは、不機嫌に聞き返した。

「なんとなく浮いちゃうのよ。だから、だんだんその場にいるのが辛くなって、行きたくなるの。別にみんなといることが辛いわけでもないし、部活の活動が嫌なわけでもないのに」

「……………」でも、スポーツ系は正直、めんどくせえと思ってるって

のもあるけどな」

「まあね」

「それにしても、ポジティブって何だよ、お前。まあ、お前らしいが」

「ポジティブとネガティブってのがあって、まあ、内容はそのままだよ。前向きに生きる人の集まる部活と、悲観的に生きる人の部活。ネガティブは基本内向的。外からの人をあまり受け付けない。兼部はダメ。特にポジティブとの。でも、ポジティブはネガティブと兼部OKなの。というか、他のもね。どんどんやっちゃってー、って感じ」

「そのやたらに細かい設定は、どこから来たんだ？」

「可奈子と話して」

恵理の答えに、柴山は呆れを含んだ苦笑いを浮かべた。

「お前ら、暇だよなー」

「想像力豊かなの」

恵理は低い声で訂正した。

RAN

2007/9/3

終戦の日

「柴山、こんな所で何してるの」

恵理は、学校の裏庭で寝転がっている柴山を見つけ、声をかけた。木陰にいた柴山は、目を隠していた手をよけ、少し目を開けた。

「瞑想」

「寝てたようにしか見えないんだけど。瞑想って寝てするもんじゃないじゃん」

「じゃあ、寝てた」

「何なの……」

恵理は呆れたように声を落とした。

「うるせえな。いつも言ってるけど、邪魔すんじゃないよ。大山はどうしたんだよ」

「可奈子は部活。もう放課後だよ」

「あー、そうか」

柴山はどうでもいいことのように返事をする。

「隣座るね」

「……」

恵理はそう言うと、柴山が寝転がっている隣に腰を下ろした。

柴山に元から許可は求めている。ただの確認だ。

柴山は少し恵理に視線を向けたが、何も言わなかった。

「また授業出なかったんだ」

「歴史の太田嫌いなんだよ」

「なんで」

「事務的でおもしろくない」

「しょうがないんじゃない？」

「今日何の日かわかるか」

「……終戦記念日だよ。新聞で見た」
「あいつ、去年も一応それに触れたけど、さらっと流しやがんの。まあ、まだ現代に入っていないからだけど」
「気に入らなかつたんだ」
「あいつは、歴史じゃなくて、政経やればいい」
「ああ、似合う」
恵理は思わず笑った。

「今日も暑いな」
「何、唐突に」
「あの放送がされた時も、暑かつたんだろうな、と思つてたんだ」
「やけにしんみりモードだね」
「じいちゃんから、よく聞いててな、戦争の話。なんか思い出してた」
柴山の声は変わらなかつたが、恵理は何となく悲しそうに聞こえた。
「だから、太田の話、気に入らなかつたの？」
自然と恵理の声も落ちる。

「小さい頃、親がいた時は、夏休みに遊びにいったら、いつも話聞かせてくれた。じいちゃんはまだ子供だったから、じいちゃんがその親父から聞いた話をしてくれた」
「あれ、柴山、ご両親……いないの？」
「いない」
「そ、そうか。……ごめん」
恵理は少し動揺してしまい、言葉につまった。
「別に。気にしてない」
「したら、今一人なの？」
「いや。じいちゃんの所にいる」
「だから、おじいちゃん子なんだ」
「別にそんなつもりねえよ」

「で、何で今日は珍しく外にいるの」

「今日だけは、外にいたくなるんだよ。特に晴れてる日は」

「おじいちゃんの話を、身近に感じようとしてるんだ」

「感じられるような気がするんだ。肌がじりじりする感じ、湿って暑く揺れる空気。ほとんど音が無い場所」

「珍しく詩人な所悪いけど、今は木陰にいるよね。じりじりしてないよね」

「やっぱ、ずっといるには暑かった」

「だろうね」

恵理は笑みをこぼした。

「でも、そう感じようとする心は、大事だと思う。柴山のおじいちゃんか、お父さんから聞いたことをさらに伝えて、柴山はまたそれを誰かに伝えてく」

「……………」

柴山は目を閉じていた。

「あれ、柴山あ、また寝たの？ まあ、ここ気持ちいいしね。私も寝ようかな。……と見せかけて、鳩尾クリティカルヒットお！」

恵理はそう言うと、腕を広げたまま柴山の横に仰向けに倒れた。

そして、柴山の上にあつた腕が、見事に彼の腹の上に落ちた。

恵理の腕が落ちたと同時に、柴山は勢い良く飛び起きた。

「いつてえー！……んだよ！ お前はよ！ だいたい鳩尾じゃねえだろ！」

「まあ、細かいこと気にしない。なんかやりたくなつた」

恵理は怒る柴山に対して、声をあげて笑っていた。

柴山は馬鹿らしくなり、またその場に仰向けになった。

草の湿った感触が、背中に広がる。

そして目を閉じると、耳がさえ、音が聞こえてくるようになる。

蝉の声、葉ずれの音、遠くで響く運動部の掛け声や吹奏学部の演奏。

だんだんと気持ち良くなり、意識が眠りの境をさまよいます。

しかし柴山は、恵理の姿を薄目を開けて確認した。
そしてまた目を閉じると、恵理には気づかれないように、小さく
ため息を吐いた。

R A N * * * 2 0 0 7 / 9 / 3 * * *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3325r/>

おかしな、ふたり。

2011年8月16日03時27分発行